

平成 28 年度 自己評価及び学校関係者評価書

1 本年度の学校評価をふりかえって

職員による自己評価、生徒や保護者のアンケート結果によると、教育課程、学習指導、生徒指導、家庭・地域との連携等どの分野においても概ね良好な数値結果が出ている。また、学校関係者評価委員会からも、年度当初の不幸な事案の影響から立ち直り、順調な学校経営が進められていることについて良好な評価をいただいた。「港魂」の旗印のもと、落ち着いた態度で意欲的に学校生活を過ごす生徒の姿には、土崎中生としての強い誇りと自覚が感じられる。来年度実施される学校創立 70 周年記念事業に向け、この勢いを大切に上昇気流に乗りながら学校経営の活性化に努めていきたい。

2 評価結果の概要

分野	評価項目	取組状況と成果・課題	評価	改善策	学校関係者評価の意見
教育課程	時期や内容の調和を心がけた特色ある学校行事の実施	<ul style="list-style-type: none"> 学校教育目標の実現と具現化に向けて、全職員で共通理解を図りながら、連携と協働により実践していく体制が確立している。各行事の実施に当たっては、「目指す生徒像」や「育てたい力」を意識して計画的に取り組むことができた。 今年度は、小中一貫した考えに立った教育の充実を図るために、学区内小学校と様々な交流活動を行い、教師及び子ども同士の絆を一層深めることができた。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 授業日数及び時数、校内行事や地域行事、小中連携の活動など、各行事の実施時期や内容、配当時間等を考え、全体のバランスを図りながら教育課程の全体計画を立案し、授業時数の確保等に遺漏のないように取り組む。 次年度は新たに周年行事を実施の予定であるため、従来の行事実施時期や内容について若干変更の必要がある。各担当間の連絡調整を密に行い、見直しをもって準備ができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> これまでの実践が基盤となって、小中交流活動の成果がよく表れた 1 年であった。一緒に集まることは難しくても一緒に目指していくことは十分可能である。今後の発展に期待したい。 生徒や保護者のアンケート、職員の自己評価などが、マンネリ化せず丁寧に分析されている。今後も継続し学校経営に生かしてほしい。内容的には、子どもと親の評価の違いが興味深かった。親は学校にもっと関心をもつべきだ。
学習指導	確かな学力の定着を目指した授業づくり	<ul style="list-style-type: none"> 共通実践事項を決定し実践を進めてきた。その結果、県学習状況調査生徒質問紙の「学校の授業がよく分かる」に対する肯定的な意見数値が、2 年生で県平均を上回った。また、全学年において家庭学習に対する取組（平日・土日の学習時間については、県平均を大きく上回った。 年 2 回本校独自に実施する学習向上のアンケート結果から「課題解決意識をもち授業に臨む」の肯定的意見数値が向上した。 家庭学習の意欲的な取組を学力向上へと繋げていくことが、今後の課題として上げられる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 「分かる授業」「興味・関心が持続する授業」を目指して、いくつかの重点項目を掲げ取り組んでいく。 生徒の実態を把握して授業づくりを進めるため、レディネステスト（事前アンケート等）の一層の充実を図る。 日常生活と関わり深い題材を取り上げ、内発的動機付けを高めながら学習の必要性を認識させる。 生徒が主体的に活動し、互いに学び合い、高め合うことができる授業形態を工夫する。 学習内容の定着を図る手立ての一つとして、各教科間の連携を図り家庭学習の一層の充実に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業参観によって、学年が進むにつれ成長している様子がよく伝わってきた。生徒は全体的に落ち着いており、3 年生の表情にはさすがと思わせる真剣味も感じられた。 掲示物はよく工夫されて全体が明るい雰囲気となっており、学習環境づくりの力を入れていることがよくわかった。一人一人の思いが大切にされていること、心に響く詩やメッセージの掲示などが特に印象に残った。 少人数指導が行われ、教師と子どもの距離感が近いと感じた。視聴覚教材を有効活用しながら、一人一人の子どもに熱心に当たっている様子が見られた。
生徒指導	共生の心を育む人間関係づくり能力の育成	<ul style="list-style-type: none"> 「人間的な触れ合いを基盤とした人間関係づくり」「生徒主体の生徒会活動」を重点として取り組んだ。役割と責任を自覚した集団生活の質の向上が見られ、他との関わり方や社会性も高まってきた。 「いじめ・不登校対策」として、アンケートによる生徒の悩みの把握に努めた。また、学担への日常的な支援とともに、教育相談担当を中心に S C と連携して組織的に対応した。完全不登校状態から、別室登校や教室復帰に好転した生徒もいた。 将来の生き方を考える力、困難を克服しようとする逞しさが不足している生徒もいる。不登校生徒を減らすことが本校にとっての大きな課題である。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 自己選択や自己決定の機会を増やし、将来を見据えた活動を様々な場面で多様な形で設定する。また、興味・関心が高い学校行事を契機として、生徒が自分に対する自身を深め、自己有用感や成就感を高めていくように努める。 教育相談担当を中心として、積極的に予防的な対応に努め、全校体制で組織的な指導・援助を行う。初期対応を的確に行い、不登校長期化の未然防止に努めていく。欠席が長期化している生徒には、関係職員や S C などチームを組み、諸機関や保護者との連携を進め、本人と保護者の双方に誠意をもって根気強く支援に当たる。 	<ul style="list-style-type: none"> 土崎中学校の生徒のあいさつは相変わらず立派である。生徒指導も一人一人に丁寧に行われている。 新入生の保護者が初めて部活動に関わる場合は、様々な配慮があれば助かることだろう。入部直後に親の会からもプリントが渡るような手配など、先輩保護者が手をさしのべる工夫があればよいと思う。 不登校生徒が多いことで難儀しているようだが、中 1 に多い部分は小中の連携を深めて解消に結びつけていけないだろうか。また、実態を聞くも保護者の理解や協力についても差があるようで、この辺に大きな課題があると感じられた。
家庭・地域との連携	地域に開かれた教育活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> 町内会長を通じ年 3 回校報を町内へ回覧し、地域に学校の様子を知ってもらう手立てとしている。また、学校自由参観日と学校祭で年 4 回学校開放を行っている他、町内会長には避難訓練の見学と講話を依頼するなど、様々な取組により地域との交流に努め、着実に学校理解が深まっている。 フィールドワークや職場訪問活動などで地域との関係づくりに熱心に取り組んだ。また、学区内小学校と土崎港をテーマとした意見交流会を開催したことで、生徒の地域への愛着は高まっている。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 学校からの一方的な情報発信ばかりでなく、地域と双方向の交流ができるような手立てを更に工夫してみたい。 来年度は、今年度の小中連携の研究成果に基づき、小学校と中学校で合同のあいさつ運動を実施する予定である。地域の関係団体とも連絡を取り合い、地域と一体となった活動に発展できるよう工夫していきたい。 来年度は創立 70 周年記念事業を実施する。式典を始め、この機会に学校・家庭・地域の連携が今まで以上に深まるようなアイデアを取り入れていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 先生方の仕事の多忙さが再びマスコミで取り上げられているが、中学生は心も体も大きく成長する時期であることを念頭に置き、将来は地域や社会に出ていくことをイメージしながら子どもを育ててほしい。 学校開放（学校自由参観日）は学校の実態を理解する有効な手立ての一つと考える。今後も継続してほしい。 土崎中学校の教育は地元に着目している。子どもの躰は家庭で行い、学校では子どもを大人に育て、地域はそれらをさらに伸ばしていくよう役割分担ができればよいと思う。